

## 「ひとつの聖なる」

### 「公同」の使徒的な教会」

(1コリント12・12～14)

#### 一、聖霊と教会

今回の取り上げる文言は、「私たちは、ひとつの聖なる公同の使徒的な教会を信じます。」です。この文言において、まず知るべきは、「教会」がニカイア信条の第三項、すなわち「私たちは聖霊を信じます」という括りに入れられていることです。聖霊と教会は、切っても切り離せない関係にあります。たとえば、こういう人がいたとします。その人はイエス・キリストを信じ、人に教えることができるといふほど聖書に精通していました。ところが、目に見える教会を嫌い、「なぜ、教会に行かなければならないのか。なぜ、教会員とのつながりを持たなければならぬのか。なぜ、牧師のおもしろくない話を聞かなければならぬのか」と考え、教会に連なりませんでした。このような人がいた場合に、ニカイア信条によれば、すなわちキリスト教会が保ってきた信仰によれば、その人が聖霊に導かれていたとは言えないわけです。高慢になっているとか、そういう次元の話ではないのです。教会に連ならなくして、聖霊の働きが豊かになされることはないのです。

#### 二、ひとつの教会

さて、「私たちは、ひとつの聖なる公同の使徒的な教会を信じます。」は、四つの要点に分解できます。それが、キリスト教会が伝統的に受け止めてきた読み方です。第一は、「ひとつの教会」です。きよりの聖書箇所を見てまいりましょう。(1コリント12・12～14) 教会は、大きな意味でも小さな意味でも、キリストをかしらとするキリストのからだです。大きな意味でも、と申しましたのは、教会が東方教会と西方教会に分かれ、さらに多岐にわたって様々な教会があるからです。小さな意味でと語ったのは、プロテスタント教会にも様々な教会があるからです。では、信仰も何でもかまわないのか申しますと、そういうわけにはいきません。イエス・キリストはすばらしい方であつたけれども、神ではなかったと信じる組織ないしは人々がいるなら、ひとつの教会に属しているとは言えないわけです。私たちは、イエス・キリストにおいてご自身を現された神を、父・子・聖霊として、位格を混同することなく信じています。なぜなら、そのように信じられてきたからであり、その根拠は聖書です。

#### 三、聖なる教会

ニカイア信条が語る教会の第二は、「聖なる教会」です。「聖なる教会」が意味していることを知る格好の聖句は、

コリント人への手紙第一1章2節です。  
(「キリスト・イエスにあつて聖なる者とされ、聖徒として召された方々へ。）」とあります。ひとつの文章の中に「聖」という言葉を、「清らかな」、あるいは「清潔な」の意味で捉えるなら、全くまちがえています。なぜならコリントの教会は、道徳的に荒れに荒れていたからです。なぜコリントの教会が「キリスト・イエスにあつて聖なる者とされ、聖徒として召された方々」なのでしょう。それは、イエス・キリストを信じる群れとされてきたからです。イエス・キリストを信じることにより、聖なる者として「世」から取り分けられたのが教会です。

#### 四、公同」の教会

ニカイア信条が語る教会の第三は、「公同」の教会」です。「公同」とは、特定の人のみに利益が及ぶのではなく、広く行き渡るといふ意味です。ニカイア信条には「カソリケー」という言葉が使われています。教会は、どこの教会に行っても同じです。もちろん、礼拝のスタイル、そして教会員の生活スタイルはかなり異なりますが、信じていることは同じです。日本の教会は恵みが少なく、聖霊が働いておらず、海外の教会は恵まれていて、聖霊充滿であるという理解がありますが、現象面だけを見ていると、そのようになります。ニカイ

ア信条が語っているのは「公同の教会」を信じていることです。すなわち、日本の教会と海外の教会とでは、聖霊の現れが異なるだけであつて、日本の教会があれで、海外の教会が霊的にすばらしいなどと、短絡的な考え方をしてはならないわけです。

#### 五、使徒的な教会

ニカイア信条が語る教会の第四は、「使徒的な教会」です。「使徒(アポストロス)」とは、福音を伝えるようにと、主イエス・キリストから権威を授けられ、遣わされた人の意味です。マタイの福音書28章が、端的に語っています。  
(「マタイ28・18～20」) この言葉は、第一義的には、主イエスが十一人の使徒たちに語られた言葉です。ですが、その後使徒たちは殉教し、あるいは死去了しました。当然です。使徒の後には、だれが使徒の務めを果たしたのでしょうか。教会です。教会が使徒的な務めを担うわけです。それが「使徒的な教会を信じます」というニカイア信条の告白です。使徒の務めは、個人が教会とは関わりなく、行うものではありません。個人が行いますと、聖書的な根拠がないばかりか、教会に混乱をもたらすことになりま。そういうわけで、教会が何を信じてきたのか知ることにより、今教会が何を信じ、今後何に力を注ぐべきかが、自ずと見えてまいります。